

## ＜夫婦関係調整（離婚）調停を申し立てる方へ＞

## 1 概要

離婚について当事者間で話し合いをしてもまとまらない場合や、離婚の話し合い自体ができない場合には、家庭裁判所の調停手続を利用することができます。調停手続では、当事者双方から事情を聞き、離婚するかどうかについて、また、離婚する場合に未成年の子の親権者を誰にするか、子と同居していない親と子との面会交流をどうするか等、子の養育について、さらに、子の養育費、婚姻中に築いた財産の分け方（財産分与）、年金分割、慰謝料等、財産に関する問題についても併せて話し合うことができます。話し合いがまとまらず調停が不成立になった場合には、別途、離婚訴訟を提起する必要があります。

## 2 申立先

相手方の住所地を管轄する家庭裁判所となります（ただし、相手方との間で、担当する家庭裁判所について合意ができており、申立書とともに管轄合意書を提出していただいたときには、その家庭裁判所でも対応することができます。）。

## 3 申立てに必要な費用

- 収入印紙・・・1,200円分
- 連絡用の郵便切手・・・140円×1枚、84円×10枚、10円×10枚、5円×2枚、1円×10枚  
合計1,100円分

## 4 申立てに必要な書類

- 申立書**（裁判所用）＋**申立書コピー**（相手方用、申立人（あなた）用の控え）
  - 申立書は、法律の定めにより相手方に送付しますので、申立書とともに相手方送付用のコピーを提出してください。申立人用の控えは、調停期日に持参してください。なお、裁判所の窓口には3枚複写式の申立書用紙がありますので、ご利用ください。
- 事情説明書1通**
- （未成年者の子がいる場合）**子についての事情説明書1通**
- 送達場所等及び連絡先の（□変更）届出書1通**
  - 送達場所等について非開示を希望する場合には、「3 送付（送達）場所及び連絡先の非開示希望の申出について」の該当欄にチェックを入れてください。
- 進行に関する照会回答書1通**
- 夫婦の戸籍謄本（全部事項証明）**
  - 戸籍謄本等は3か月以内に発行されたものを提出してください。
- （年金分割における<sup>おん</sup>按分割合（分割割合）を求める場合）**「年金分割のための情報通知書」1通**
  - 情報通知書の請求手続については、年金事務所の窓口にお問い合わせください。  
※ 被用者年金制度が厚生年金保険制度に一元化されたことにより、平成27年9月30日までに発行された情報通知書は使用できません。また、厚生年金の他にも年金がある場合、新たに情報通知書を取り直していただく可能性があります。

## 5 調停手続に必要な書類等の提出方法等

- ・ 調停では、必要に応じて、自分の主張を裏付ける資料等を提出していただくことがあります。

調停委員会の指示に従って提出してください。

※ 必要になる書類の例

＜養育費の必要な子のいる場合：収入に関する書類等＞

→ 源泉徴収票写し、給与明細写し、確定申告書写し、非課税証明書写し等、申立人の収入が分かるもの

＜財産分与を希望する場合：夫婦の財産に関する資料等＞

→ 不動産登記事項証明書、固定資産税評価証明書、預金通帳写し、残高証明書等、夫婦の財産の内容が分かるもの

＜婚姻費用等について決まったことがある場合：その内容の分かる書面＞

→ 合意書、公正証書、調停調書、審判書等

- ・ 書類等を提出する場合には、裁判所用のコピー1通を提出するとともに、調停期日には申立人用の控えを持参してください。相手方に交付したい書類等を提出するときは、裁判所用及び相手方用としてコピー2通を提出してください。
- ・ 書類等の中に相手方に知られたくない情報がある場合で、家庭裁判所が見る必要がないと思われる部分（住所秘匿の場合の源泉徴収票上の住所等）は、マスキング（黒塗り）をしてください（裁判所用及び相手方用のコピー2通全て同様に作成してください。）。
- ・ マスキングができない書面については、「非開示の希望に関する申出書」に必要事項を記載し、その申出書の下に当該書面を付けて一体として提出してください。この申出書を参考に、裁判官が、相手方の閲覧・謄写（コピー）申請を認めるかどうか判断します。

6 提出された書類等の閲覧・謄写（コピー）

申立人の提出した申立書については、法律の定めにより相手方に送付されます。それ以外に調停手続中に一方の当事者が提出した書類等については、他方の当事者は、閲覧・謄写の申請をすることができます。この申請に対しては、裁判官が、円滑な話し合いを妨げないか等の事情を考慮して、許可するかどうか判断します。

7 調停の進め方について

調停の流れは下図のとおりです。調停は平日に行われ、1回の時間はおおむね2時間程度です。申立人待合室、相手方待合室でそれぞれお待ちいただいた上で、交互又は同時に調停室に入ってもらいます。調停委員が中立の立場で、双方のお話をお聞きしながら話し合いを進めていきます。なお、必要に応じて、家庭裁判所調査官が、調停期日に立ち会ったり、調停期日の間に未成年の子の監護の状況等について調査を行う場合もあります。

